

みんな
でやると、
もっとたの
しいよ



できた！
うれしい！
またやり
たい！



はじめの
いっぽ、
ゆうきの
いっぽ



すべての子ども・若者が
体験機会を得られる社会へ

こども まんなか 体験機会の提供 サポートブック

やって
みよう！
きみの
ひみつ
パワー！



わくわく
たいけん
こころが
おどる



ドキドキ
ワクワク



ともだちと
えがおで
たいけん



あそんで、
まなんで、
ひらめいた



2026(令和8)年6月
山口県青少年育成県民会議



すべての 子ども・若者が 体験機会を 得られる社会へ

いま必要なのは
支援機関同士の
横のつながり

子どもたちの声に耳を傾け
子どもたちの現状や思考
「やりたい!」体験活動を
支援の連携基盤につなぐ

支援機関同士が連携して
子どもたちのニーズや
体験活動に関する情報交換など
顔の見える関係を構築

多様な体験機会を創出し、
さまざまな環境下にある
すべての子どもたちに
体験機会をつなげる

CONTENTS

すべての子ども・若者が
体験機会を得られる
社会へ p.1

子どもたちの現状と
考えられる対応策 p.3

「こどもまんなか
支援活動推進会議」の取組
p.5

—— 令和7年度取組事例 ——

○ Report no.1 萩市 p.7

○ Report no.2 光市 p.10

○ Report no.3 長門市 p.13

○ Report no.4 周南市 p.16

○ Report no.5 周防大島町
p.19

○ Report no.6 宇部市 p.22

○ Report no.7 山口市 p.23

○ Report no.8 防府市 p.24

チャンス・フォー・チルドレン代表
今井悠介氏
Special Interview
p.25

少子化が急速に進行し、子育てを取り巻く環境が大きく変化しています。こうした中であっても、すべての子ども・若者が、夢と希望を持って、幸せに、そして心豊かに成長するには、「社会全体で子どもたちを温かく支える環境をつくっていくこと」が必要です。

さらに、必要とするすべての子どもたちに支援をつなげるためには、学校、児童養護施設や児童館などの児童福祉施設、公民館、図書館、青少年教育施設などの社会教育施設、放課後児童クラブ、子ども会、スポーツ少年団などの青少年団体、こども食堂など(以下「支援機関」という。)の地域資源を活用し、官民が連携・協働し、「こどもまんなか」の視点に立った取組により、子どもや子育て世帯のウェルビーイングの向上を図っていくことが大切です。

このため山口県青少年育成県民会議では、令和7年3月に山口県が策定した「**やまぐち子ども・子育て応援プラン**」に基づき、**子どもたちと必要な支援をつなげるため**、行政機関や民間団体等で構成する「**こどもまんなか支援活動推進会議**」を立ち上げ、情報交換や協議を行うとともに、各地域において、複数の支援機関が協働して、子どもの主体性を発揮できる多様な体験機会の創出に取り組んでいます。

体験活動を通じて社会全体で 子ども・若者を温かく支える環境を目指す



支援機関が連携・協働して子どもの主体性を 発揮できる多様な体験機会を創出し 子どもたちにつなげる

子どもたちの現状は…？

子どもが直面する困難は多様化

- ・地域のつながりの希薄化
- ・虐待やいじめ、ひきこもりなど
- ・9人に1人の子どもの経済的に困難な状況
- ・価値の多様化（多様なニーズ）

体験機会の格差

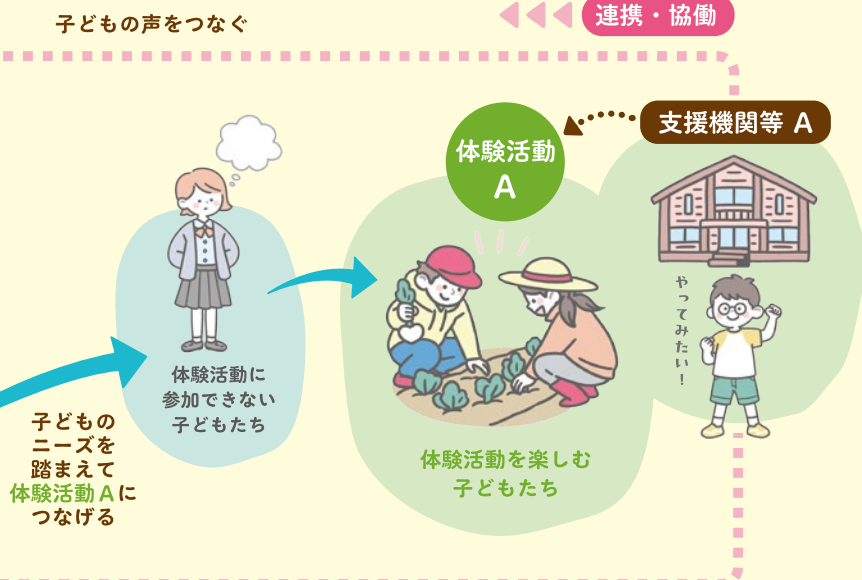
特に世帯年収が低い家庭の子どもが学校外の体験活動等への参加が少ない傾向にあり、子どもたちの体験機会に格差が生じていると言われている。

体験の必要性

子どもたちに多様な体験機会の選択肢があることは、子どもたちの自己肯定感を高め、身体的・精神的・社会的に将来にわたって幸せな状態「ウェルビーイング」に資する。

私たちが構築したい
支援の連携プラットフォーム

連携・協働



令和7年度に取り組んだのは…？

地域において、教育や福祉などの子育て支援機関による連携の基盤の形成と、子ども・若者一人ひとりのニーズに対応した多様な体験機会の創出に取り組むとともに、社会全体で取組を進めていくための理解促進を図りました。

【取組内容】

1 支援機関による

連携プラットフォームの形成に向けた推進会議の設置

地域における支援の連携基盤の形成に向けて、行政機関や民間団体等で構成する「こどもまんなか支援活動推進会議」を立ち上げ、子どもたちに必要な支援をつなげるための情報交換や協議を実施。

2 すべての子どもたちに向けた

多様な体験機会の創出

各地域において、支援の連携基盤を形成し、複数の支援機関が協働して、子どもの主体性を発揮できる多様な体験機会を提供。

考えられる対応策は…？

1 子ども・若者一人ひとりの課題や多様なニーズに対応していくための支援のアップデートが必要

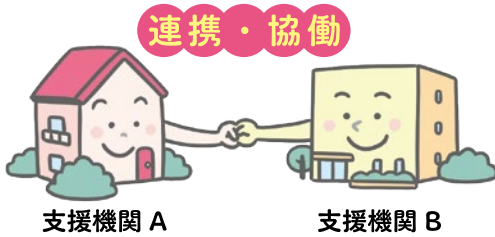
子ども・若者のさまざまな課題やニーズに対応していくためには、支援機関や民間団体が子ども・若者の声に耳を傾け、子どもたちの視点に立って体験機会を提供していくことが必要。

【そのためには…】

支援機関で子どもの声（ニーズ）をつなぎ、複数の支援機関が連携・協働した支援を行うための基盤が必要

2 支援の連携基盤を形成することで人的リソースの効果的な活用を目指す

人口減少や高齢化を背景に、地域において教育や福祉など支援機関による連携基盤（プラットフォーム）を形成し、人的リソースを最大限に活かす。



連携・協働 ▶▶▶

子どもの声をつなぐ



3 社会全体で取組を進めていくための理解促進

● 実践事例集の作成および情報発信

多様な体験機会の創出等に関する実践事例集を作成し、広く情報発信。

● 理解促進講演会の開催

子どもたちへの体験機会の提供について理解を深め、課題解決に向けて共に考えていくための理解促進講演会を開催。

令和7年8月23日（土）／山口県教育会館（山口市）
テーマ「すべての子ども・若者に体験機会の提供を」
講師 今井 悠介氏

▼▼▼ 25・26 ページへ

● 令和8年度入学の小学1年生に向けた「家庭の日」と「体験活動」促進用クリアファイルの配付

「家庭の日」と「体験活動」の促進用クリアファイルを作成し、県内の小学校に令和8年度に入学される全児童（258校約9千人）へ配付。うち90校の小学校には、地元の支援機関が仮入学または入学式に訪問し、児童や保護者等に「家庭の日」や「体験活動」の大切さを伝え、直接配付。

「こどもまんなか 支援活動推進会議」 の取組

令和7年3月に行政機関や民間団体等で構成する「こどもまんなか支援活動推進会議」を立ち上げ、子どもたちと体験機会をつなげるために情報交換や協議を行いました。

1 「こどもまんなか 支援活動推進会議」の 設置

地域の支援機関が協働し、子どもの主体性を発揮できる多様な体験機会の創出に向けて、活動の主体となる市町民会議等の事業担当者間で情報交換、協議・検討を行うことを目的に、行政機関や民間団体等で構成する「こどもまんなか支援活動推進会議」を設置しました。

※事業主体となる山口県青少年育成県民会議内に「こどもまんなか育成支援活動プラットフォーム形成事業推進部会」として立ち上げ。



2 推進会議の活動

1 令和7年 6月3日(火) 第1回 情報交換・ 意見交換会の実施

地域における支援の連携基盤の形成に向けて、活動の主体となる地域の支援機関の事業担当者間で情報交換、協議・検討を行いました。



【参加者】

県青少年育成県民会議、青少年育成市町民会議、国立山口徳地青少年自然の家、県立青少年自然の家、母子生活支援施設、県こども食堂支援センター、教育庁学校安全・体育課

2 令和7年 8月23日(土) こどもまんなか 育成支援活動に関する 理解促進(講演会への参加)

子どもたちへの体験活動の提供について理解を深め、課題解決に向けて共に考えていくため、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン 今井悠介さんを講師とする理解促進講演会に参加するとともに意見交換を行いました。

3 令和7年 10月28日(火) ~29日(水) 第2回 情報交換・ 意見交換会の実施 (東部・西部地域で開催)

開催地 萩市・岩国市

各地域の支援機関が集まり、支援の連携基盤の形成に向けて、課題と取組内容について情報交換をしました(会長・事務局長会議の中で実施)。

【参加者】
県青少年育成県民会議、青少年育成市町民会議



4 令和8年 1月22日(木) ~2月6日(金) 第3回 情報交換・ 意見交換会の実施 (現地取材による意見交換)

取材地 長門市、萩市、光市
周防大島町、周南市

各地域の支援機関を訪問し、取組の成果と今後の課題について情報交換・意見交換をしました(事例集の作成に係る取材を兼ねる)。

【参加者】 県青少年育成県民会議、青少年育成市町民会議、他取材チーム

こどもまんなか育成支援活動プラットフォーム形成事業 取組一覧

「子どもたちが真ん中にある未来」に向けて、県内で9つの団体がさまざまな取組を行いました。

区 分	所在地	テーマおよび実施した体験活動	ページ
認定NPO法人 山口せわやき ネットワーク	萩市	【テーマ】 不登校、ひきこもりなどさまざまな困難に直面する子ども・若者への体験機会の提供に向けて、「居場所づくり」に取り組む団体を中心とし、横のつながりを目的とした協議会の立ち上げ 【実施した体験活動】 ①わくわくクラブ ②ちょっと出かけてみよう！りんごがり&BBQ ③セミナーハウス宿泊体験活動	p.7
光市 青少年健全育成 市民会議	光市	【テーマ】 故郷の歴史や文化など郷土愛を育む体験機会の創出に向けて、関係機関による準備委員会の立ち上げ、地区会議を通じて子どもの声の聴き取り 【実施した体験活動】 ①少年少女セミナーplus ②English Boot Camp in Hikari ③デイキャンプ ④そば事業	p.10
長門市 青少年育成 市民会議	長門市	【テーマ】 「子どもの体験活動への参加」、「支援者の横のつながり」、「子どもの主体性を尊重した体験活動」を課題とした連絡協議会の立ち上げ 【実施した体験活動】 ①伊上まんまるこども食堂 ②伊上こども塾 ③学習支援寄り合いステーション ④手作りチョコレートと生け花で感謝を届けよう！	p.13
周南市 青少年育成 市民会議	周南市	【テーマ】 多くの子どもたちが多様な体験活動に参加できるよう関係機関において情報交換や協議の実施、困難に直面する子どもたちの声の聴き取り 【実施した体験活動】 周南こどもLAB in 富田中学校	p.16
周防大島町 青少年育成 町民会議	周防 大島町	【テーマ】 関係機関との連携基盤の構築に向けて、青少年育成町民会議内に情報交換・協議検討を行うプラットフォームの形成 【実施した体験活動】 ①東和フェスティバル(起業体験) ②和太鼓ワークショップ等、学校と連携した体験活動	p.19
宇部市地区 ふれあい運動 推進員会 連絡協議会	宇部市	【テーマ】 不登校等困難に直面する子ども・若者などへの多様な体験機会の創出に向け、横のつながりを目的とした関係機関とのネットワークを形成 【実施した体験活動】 ①ふれあいクッキング ②みんなのためのeスポーツ大会	p.22
山口市 青少年健全育成 市民会議	山口市	【テーマ】 子どもや地域の大人の声を聴く場の創出とともに、子どもの体験機会の創出と地域の課題解決に取り組むことで、持続可能な地域づくりを進めるプラットフォームを形成 【実施した体験活動】 ①Tシャツのデザインを考える会 ②とくちこどもまんなかキャンプ～年越しそば流し&星空観測～	p.23
佐波地域 青少年育成 連絡協議会	防府市	【テーマ】 連携した体験機会の創出に向け、学校や関係団体による「情報交換会議」の開催、子どもたちと接している支援機関等から子どものニーズの聴き取り 【実施した体験活動】 ①地域の清掃活動 ②防災キャンプSABA(地域の危険箇所マップ作り) ③読み聞かせ・おやつ作り ④生け花とメッセージによる高齢者との交流	p.24
華浦地区 青少年育成 連絡協議会	防府市	【テーマ】 関係団体等と連携する中で横のつながりを深めるとともに関係機関等から子どものニーズを聴き取り、不登校やひきこもりなどの子どもたちを含めた体験機会の創出 【実施した体験活動】 盲目のバイオリニスト白井崇陽ふれあいコンサート	p.24



わくわくクラブでの料理教室の様子

令和7年度
取組事例

Report no. 1

萩市

取組テーマ

萩こどもアクティブチャレンジ

支援機関の連携による

連携基盤の形成と体験機会の提供



Q なぜこの取組を？

A 支援機関の連携強化による
切れ目ない支援の実現

不登校児童・生徒が増加傾向にある中、萩市では「子ども・若者育成支援推進法」の規定に基づき平成24年3月に設置した「萩市子ども・若者総合サポート会議」を中心に、不登校の児童・生徒、ひきこもりの支援を行なってきましたが、居場所支援を行なっている支援機関同士の横の連携で不十分な部分があり、各支援団体が対象としている年齢層や活動内容等を団体同士で共有することができていませんでした。義務教育終了後、該当者の支援のつながりがうまくいかな

【対象者】

不登校やひきこもりなど、さまざまな困難に直面する子ども・若者

【取組団体】

認定NPO法人山口せわやきネットワーク、萩市青少年育成市民会議、萩地域青少年育成市民会議、Waku②BASE、NPO法人みち草舎、萩市社会福祉協議会、萩輝きスクール、萩児童館、萩図書館、萩ユースふれあいスペース事業、萩市教育委員会事務局(学校教育課、文化・生涯学習課)

かった事例が見受けられたことから、義務教育終了後の切れ目のない支援や該当者の支援の選択肢を増やすためにも、支援機関同士の連携強化を図ることが重要と考えました。今回の事業実施を受け、「団体同士のネットワークづくり」に取り組みました。

萩市子ども・若者
総合サポート会議

教育、保健福祉、司法・警察など多様な分野の39団体で構成される協議会。目的は、さまざまな困難に直面する子ども・若者が就学や就労など自立した社会生活を営むことができるよう、各分野の支援を総合的に実施すること。

義務教育卒業後
支援が
断絶されやすい

義務教育

萩市
子ども・若者
総合サポート
会議
どの
支援機関に
つながり…？

支援機関等
A

支援機関等
B

支援機関等
C

Q どのように進めたの？

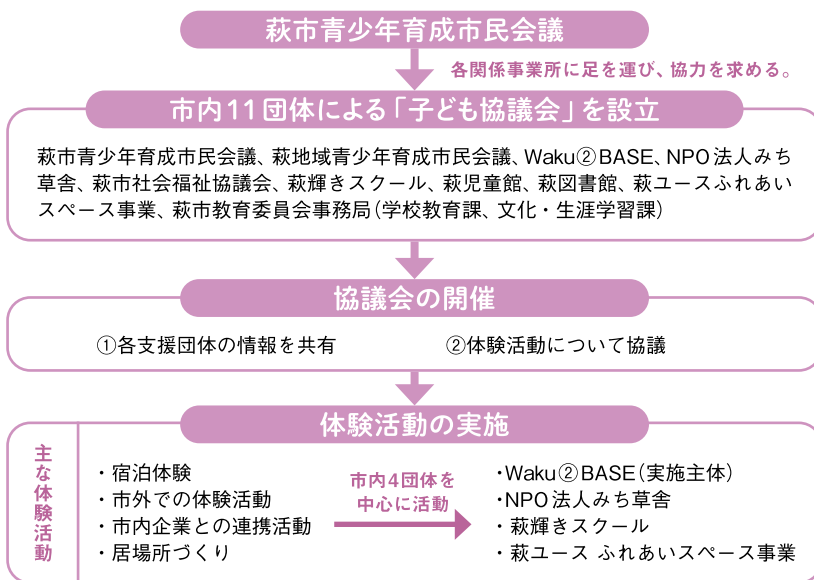
A 「子ども協議会」を設立し
定期的な情報共有を図った

萩市青少年育成市民会議が各関係事業所を個別訪問し、事業内容を説明しました。その後、萩市内11団体で新たに「子ども協議会」を立ち上げ、各支援機関が対象とする該当者の範囲や活動内容等について情報交換を行い、困難や生きづらさに直面する子ども・若者を対象とした体験活動について協議しました。また、対象となる子ども・若者から直接話を聴くことは難しいため、協議会に参加する各関係団体（実際に子ども・若者と関わる機会のある支援団体）から意



.....
参加した
子ども・若者に
各支援機関を
知ってもらい
新たな選択肢の
提供を目指す
.....

見聴取を行う形で子どもの声を集めました。協議の結果、①参加した子ども・若者に各支援機関を知ってもらうこと（他の支援機関を知ること、子ども・若者に新たな選択肢を提供することが目的）、②今までどこにもつながっていなかった子ども・若者にとって本事業が始めの一歩となることの2つを目的とし、体験活動を実施することとしました。



Q 取組全体の感想は？

A 支援機関同士の連携は強化
対象者につなぐ工夫が必要

各支援機関がお互いの活動内容等を知ることができ、協議会に参加する団体の活動に他の支援機関が参加するなどの交流も図られました。また、各イベントに参加した子ども・若者が、所属していない支援機関の職員と交流できたことも体験活動の成果として挙げられます。この取組を通じ、支援機関に所属している子ども・若者の参加が見受けられました。

一方、どこにもつながっていない子ども・若者の参加はなく、体験活動の内容および周知・アプローチの方法を再度検討する必要があります。

.....
どの支援機関とも
つながっていない
子ども・若者に
いかに情報を
届けるかが
今後の課題
.....



Q 今後の課題は？

A 対象者へのアプローチ方法、体験活動の内容の要検討

体験活動への参加に意欲的にも関わらず、どの支援機関ともつながっていない子ども・若者を把握し、いかに情報を届けるか、また、参加してもらえる体験活動をいかにブラッシュアップさせるかが今後の課題です。例えば、保護者との関係性が良い子ども・若者であれば、保護者を通じて活動を周知することで参加につながる可能性がありますが、保護者の相談会など、保護者をターゲットとした取組についても検討する必要がありますと考えます。体験活動自体については、顔が見えない活動（eスポーツなど）を体験活動の一つとすれば参加する可能性が高まると考えられます。以上を踏まえ、来年度も今年度と同様の対象者への体験活動の提供を協議会で引き続き検討します。また、今年度の対象者に加え、経済的に困窮している子ども・若者へのアプローチも併せて検討していきます。

参加してもらえない
体験活動にいか
にブラッシュア
ップさせるかも
大きな課題



代表者の
声



Waku@BASE
藤井 航平さん

体験活動を求めている
子ども・若者に届けたい

取組を通じて、支援機関につながっていない困難に直面する子ども・若者を把握し、情報を届けることの難しさを痛感しました。対象者の数、年齢、支援機関とのつながりを把握し、適切な体験機会を提供できるよう支援機関とのさらなる連携強化を図ってまいります。

●実施した体験活動

支援対象者のニーズに応え、
定期的なイベント等を実施

協議会で支援機関から支援対象者のニーズを確認・検討し、3つの体験活動を行いました。

■対象となる子ども・若者への声かけ・つなが

- 保護者を対象にメールにて周知
- 各支援機関経由でチラシの配布
- 各小中学校を回り、説明および対象者へのチラシ配布を依頼
- 支援機関を通じた体験イベントと子どもたちのつなが



セミナーハウス宿泊体験活動

【日時】令和7年11月14日(金) 18時30分～15日(土)12時00分

【内容】萩セミナーハウスで宿泊体験を実施。星空観察(萩博物館)やピザづくり体験、保護者を招いて「保護者カフェ」を行なった

【参加人数】13名



ちょっと出かけてみよう! りんごがり&BBQ

【日時】令和7年10月30日(木)9時30分～14時30分

【内容】山口市徳佐のりんご園にて、りんごがりおよびBBQの実施

【参加人数】19名



わくわくクラブ

【日時】令和7年10月22日(水)～令和8年2月27日(金)

【内容】毎週金曜午前中、Waku@BASEにて居場所の開放。不定期で市内企業と連携した体験活動を実施

※当初は月1回体験活動を行う予定であったが、参加がなかったため途中からハードルを下げた。

【参加人数】42名



「少年少女セミナーplus」の様子

令和7年度
取組事例

Report no. 2

光市

取組テーマ

「光っ子」チャレンジ応援事業

既存の支援基盤を活用した連携プラットフォームの
形成および体験機会の提供



Q なぜこの取組を？

A 支援のネットワークを広げ
支援機関同士を

より深くつなげるために

過去に教育委員会や市民会議が主催してきた
体験活動等の行事や取組を振り返る中、経済的
に困難に直面する家庭へのアプローチや、周り
との関わりが難しい子どもにどう向き合ってい
くかが、大きな課題として挙げられてきました。
また、過去の体験イベント実施後の子ども向け
アンケート調査により、「光市や地域のことを知
らない子どもが多い」、「自分の学校以外の子ど
もたちとの交流が極めて少ない」、「外国の文化

【対象者】

不登校を含めさまざまな困難に
直面する子ども・若者

【取組団体】

光市青少年健全育成市民会議、
光市教育委員会(学校教育課・
文化社会教育課)、光市小学校
長会、光市中学校長会、光市(福
祉部局)、こども食堂、光ジュニ
アクラブ など

に触れたり、学んだりする機会が少ない」など
の現状も把握してきました。こうした中、現在
困難な環境にいたり、つながりが乏しい子ども
たちに対するアプローチと、光市らしい体験機
会の創出には、効果的な支援のあり方について、
継続的に協議・検討できる支援の連携プラット
フォームの構築が重要と考えました。そこで、既
存の基盤を活用して、支援のネットワークを広
げ、支援機関同士がより深くつながるために、こ
の事業に取り組むこととしました。

効果的な支援のあり方について
継続的に協議・検討できる
支援の連携プラットフォーム
の構築が重要



Q どのように進めたの？

A 既存の支援基盤を基に、必要とされる支援機関と連携し、関係性を深めた



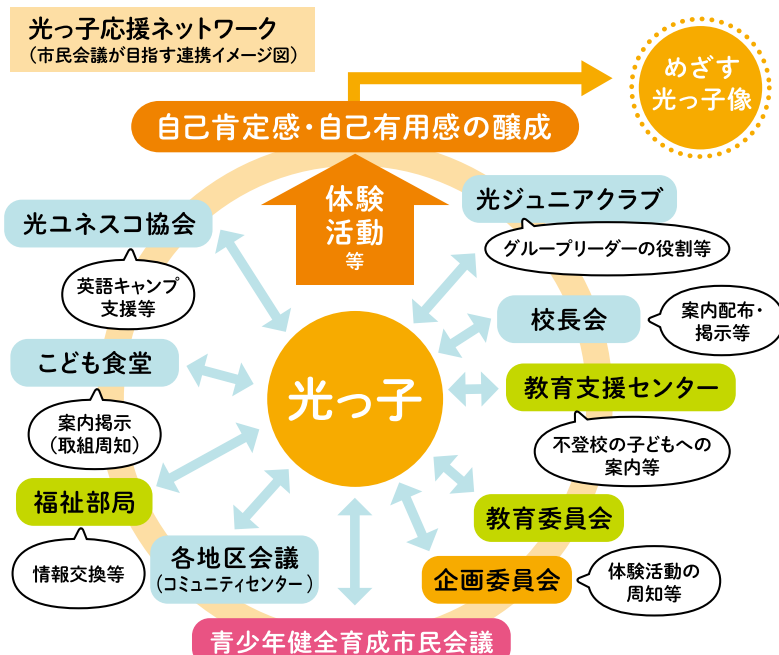
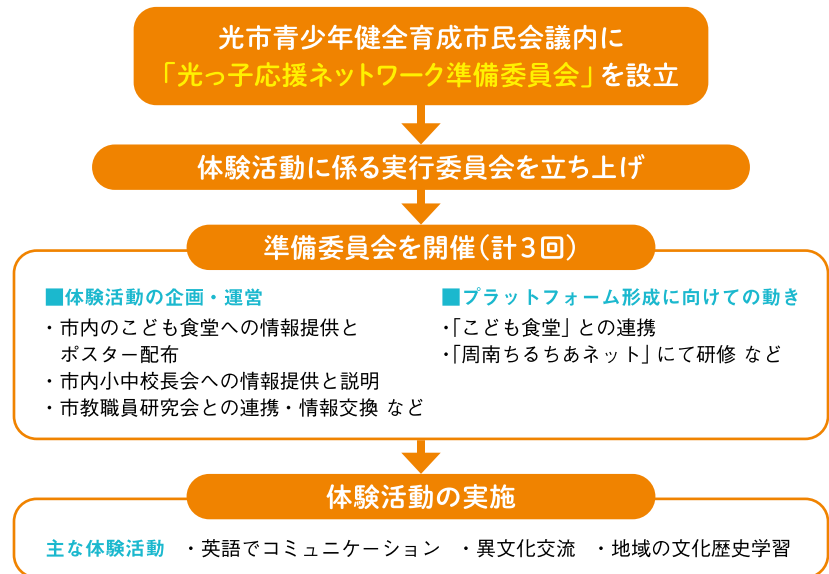
張させ、複数にわたる協議を実施し、協議の結果も踏まえつつ体験活動を企画・運営しました。

まずは光市青少年健全育成市民会議内に連携プラットフォーム「**光っ子供援ネットワーク準備委員会**」を設立し、体験活動に係る実行委員会を立ち上げました。次に体験活動のポイントとして、支援対象となる子どもが通っている学校以外の子どもたちとの交流の機会が持てるよう市内の全小中学校から参加者を募り、ふるさと光市について学べ、外国の文化に触れられる体験イベントを企画しました。さらに、子どもの声や思いをこれまでのセミナーやワークショップ等での感想やコミュニケーションセンター職員等からの聴き取り、光市生徒指導連盟(校外補導連盟)等での教員間の意見を企画に反映させることを決定しました。その後、連携すべき組織や団体等に声かけを行ってネットワークを充実・拡大させ、複数にわたる協議を実施し、協議の結果も踏まえつつ体験活動を企画・運営しました。

Q 取組全体の感想は？

A 継続的に考えることの重要性が共有できた

今年度の取組は、課題を抱えていたり、困難な環境にいる子どもたちの現状を再認識する機会



会となり、また、子どもたちを取り巻く組織や団体が連携したプラットフォームをつくり、継続的に考えていくことの重要性を認識し、共有することができました。また、プラットフォームづくりを進めていく中、当初考えていた連携イメージ図よりも、より「子ども中心」であることが必要と気付かされ、新たな連携イメージ図へと発展させることができました。来年度以降はこの新たな連携イメージ図をもとに、プラットフォームのさらなる充実を図っていきます。

Q 今後の課題は？

A 支援体制のさらなる充実と 魅力的な体験活動の創出が 課題

光市における子ども支援体制は、市の教育委員会や福祉部局、さらには光市教員研究会などの団体と連携し、行政面ではかなり充実していると思っていましたが、工夫が必要な部分があることが分かってきました。今後、困難に直面する子どもたちに関わるすべての支援機関が集結するようなプラットフォームづくりに向け、引き続き取り組んでいくことが第一の課題です。また、困難な状況にいる子どもたちやその保護者のもとに体験イベントの情報を届けるための方法の模索、さらに、目に止まったり、心を揺さぶるような魅力的な体験活動の創出も課題としています。

困難な状況にいる
子どもたちや
その保護者のもとに
体験イベントの情報
を届けるための
方法を模索



代表者の声



光市青少年健全育成市民会議
事務局長
（光市教育委員会青少年センター所長）
酒井 宏高さん

必要とされる支援機関と
さらにつながっていききたい

今年度は、中高生のボランティア団体「光ジュニアクラブ」や光ユネスコ協会と新たなプラットフォームづくりについて認識を共有しました。また、周南市の子ども子育ての民間団体「周南ちるちあネット」とつながり、ネットワークづくりのポイントや注意点などの確認ができました。来年度はプラットフォームのさらなる発展・充実を目指します。

● 実施した体験活動

ふるさと光について学び、 外国の文化に触れる体験活動

過去の体験イベントの子ども向けアンケート調査の結果を踏まえた3つの体験活動を企画・実施しました。

■ 支援対象となる子ども・若者への声かけ

- 市内のこども食堂11カ所への情報提供
- 市の小・中学校長会へ情報提供
- 青少年センター公式サイトにて情報提供

地区会議（コミュニティセンター） 企画イベント

デイキャンプ（大和地区会議）

【日時】令和7年8月9日（土）

【内容】テント張りやカレーライスづくり、宝探しゲームなど

【参加人数】小学生10名、中学生18名、ボランティア6名、スタッフ22名

そば事業（塩田地区会議）

【日時】令和7年7月～令和8年1月

【内容】そばの種まき、刈り取り、脱穀、そば打ち体験

【参加人数】小学生35名（市内5小学校から）、スタッフ15～20名



English Boot Camp in Hikari

【日時】令和7年10月11日（土）

【内容】1日英語でサバイバル ①伊藤公資料館にて伊藤公の功績を英語で学ぶ ②周防の森ロッジにてALTや他校生徒と共にピザづくりやミッションゲームなどに取り組む

【参加人数】中学生19名（市内5中学校から）、高校生2名、英語関係指導者8名、スタッフ8名



少年少女セミナーplus

【日時】令和7年11月29日（土）

【内容】冠天満宮、普賢寺、海商通りなどをめぐって光市の歴史と地域について学ぶフィールドワーク

【参加人数】小学生13名（市内5小学校から）、スタッフ7名



「遅れバレンタインデー・ありがとうを伝えよう」

長門市は、中心部と周辺部との距離的な隔たりに加え、交通手段が少ないため生じる移動の困難や、家庭の事情等を背景とする子ども・若者の体験格差が以前より課題となってきました。また、学習意欲があるにも関わらず、さまざまな事情のため塾に通えない子どもの存在も課題となっています。体験が不足したまま、もしくは十分な学習機会が得られないまま成長した子ども・若者からは「長門市には楽しい場所が

Q なぜこの取組を？

A 支援機関の連携により、どの地域からでも参加できる体験活動を創出したい

中心部と周辺部との距離的な隔たり、移動の困難が問題



ない」「都会に出たい」等の声が聞かれます。子どもたちは故郷に魅力を感じていない傾向があり、長門市では子ども・若者が心を動かすような体験機会をどのようにして提供するか、子どもの学習環境をいかに整えるかを考えていく必要があります。また、体験機会の創出においては、「どの地域に住んでいても参加できる」ことが重要であるため、まずは油谷伊上地域、三隅地域、仙崎地域の支援機関が連携し、協議・検討を重ねる必要があると考え、支援の連携プラットフォームの形成に取り組みました。

令和7年度
取組事例

Report no. 3

長門市

取組テーマ

長門子どもまん丸事業

3つの地域（油谷・三隅・仙崎）の状況や取組を共有し
体験格差の解消と郷土愛の醸成を目指す



【対象者】

これまで体験機会が少なかった子ども・若者

【取組団体】

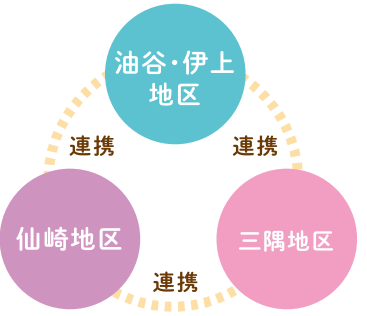
長門市青少年育成市民会議、まちづくり協議会、老人クラブ、地域おこし協力隊、こども食堂、こども塾、三隅駅舎運営団体

Q どのように進めたの？

A 3つの地区の支援機関が集まる

「長門市子どもまんなか事業連絡協議会」を軸に活動を展開

長門市青少年育成市民会議内で支援機関の連携内容を確認し、対象の支援機関を訪問して協力をお願いかけました。地域での活動を積極的に進めていることも食堂や学習支援団体、婦人会団体などから賛同を得て、「長門市子どもまんなか事業連絡協議会」を立ち上げ、活動をスタートしました。年4回の検討を重ねる中で、体験活動の内容について、直接、子どもたちの声を聞いた方が良いとの意見があり、中学生等への聴き取りを行いました。その声も踏まえて、体験機会の提供に当たり、教育支援センターの協力を得て、油谷地域ではこども食堂、こども塾、伊上文庫を行い、三隅地域では学習支援を行い、仙崎地域では料理体験を実施しました。

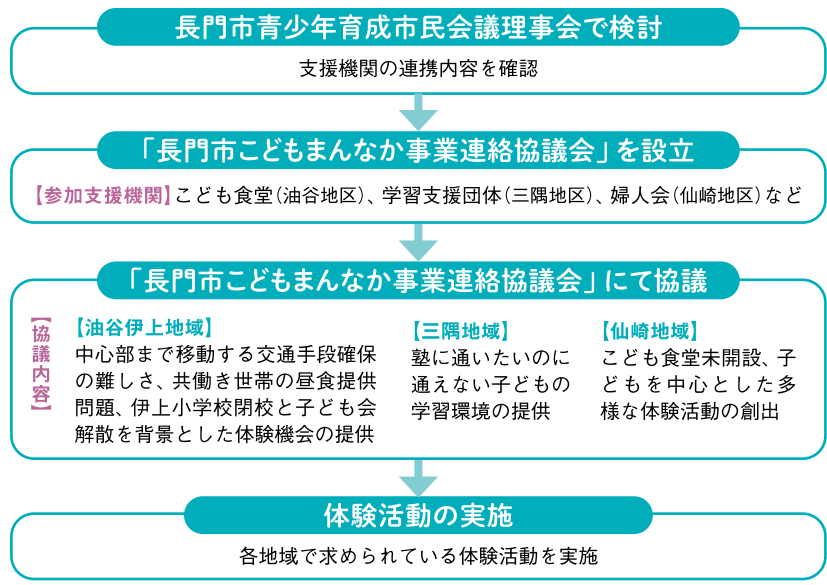


Q 取組全体の感想は？

A 3つの地域がつながり

子ども・若者の選択肢が増えた

長門市における3地域の状況や特性・良さ、それぞれが抱える課題について情報共有を図ることとで、隔たった地域の支援機関が互いの取組を深



く知ることができ、身近に感じられるようになりました。連絡協議会で「見知らぬ人たちと体験活動を共にすることに不安を感じる子どもたちが安心して参加できる体験イベントを考えよう」と話し合った後、3地域が連携して、さまざまな事情により体験イベントの参加が難しい子ども・若者にも声かけを行うとともに、体験イベントの実施時には心が許せる大人も同伴し、安心して活動できる環境を創出することで、子どもたちのニーズに対応することができました。次年度以降は、支援の連携プラットフォームの構築に向けた取組のさらなる充実、支援地域の範囲や連携する支援機関の拡大を図ってまいります。



Q 今後の課題は？

A 体験イベントの内容や、情報を届ける方法についても今後の課題に

体験イベントを実施する中で、多くの子ども・若者から「楽しかった」との感想がありました。が、「こうした一方で、「一人で過ごしたい」、「ゆっくりしたい」、「土日は行事が重なって忙しい」などの声もありました。また、人と関わることが苦手な子ども・若者は、ゲームなどのオンライン環境での交流を好むことも分かりました。これらの意見・思考を踏まえ、体験活動の内容に、**オンラインを導入する**など実施内容を再度検討し、次年度以降の体験イベントの企画・実施に活かしたいです。また、今回はさまざまな支援機関を通じて子ども・若者へ体験イベントへの参加の呼びかけを行いました。体験活動への参加を希望するものの、その情報が得られない子ども・若者のもとへ情報を届けられる仕組みづくりも今後の課題です。

体験活動には参加したいけど人と関わるのは苦手だな…



代表者の声



長門市青少年育成市民会議
事務局
久保 志穂美さん

より多くの支援機関とつながり、どんな子ども・若者にも有意義な体験イベントを届けたい。どんな状況にあっても、どの地域に住んでも体験活動に参加できる状況を作ること、長門市の魅力が伝わる有意義な体験機会を創出することが私たち大人の役目です。支援の連携プラットフォームのさらなる充実を図り、それが実現できるよう邁進します。

●実施した体験活動（一部）

それぞれの地域に求められる特徴ある体験イベントを実施

3つの地域それぞれに求められている体験活動を実施。支援の連携プラットフォームにより、子どもたちの他地域の体験活動への参加もハードルが低くなった。

■支援対象となる子ども・若者への声かけ

- 学校や支援施設などでのチラシ配布
- 連絡協議会の支援機関から直接声かけ

【三隅地域】

学習支援 寄り合いステーション (三隅駅舎)

【内容】地域の方と学校帰りの児童生徒の交流(学習支援)

【参加人数】8名



【仙崎地域】

「遅れバレンタインデー・ありがとうを伝えよう」

【日時】令和8年2月17日(火)、28日(土)

【内容】手作りチョコに花束をそえてありがとうを伝える

【参加人数】10名

【油谷地域】

伊上まんまるこども食堂

【日時】令和7年7月24日(木)、10月13日(月)、11月3日(月・祝)、11月24日(月・祝)

【内容】お寿司、唐揚げ定食、カレーライス、ハンバーグ定食 ※子ども無料、大人300円

【参加人数】163名



【油谷地域】

田植え体験・水辺の生き物観察・稲刈りイナゴ狩り体験

【日時】令和7年6月～10月

【内容】田植えから稲刈り、イナゴについての学習など

【参加人数】18名



クラフトコーナーで実施した竹の食器作り

子ども・若者の**体験格差**が生じる主な原因として、①保護者の負担（金銭面、時間、送迎など）、②保護者の経験不足（保護者が体験活動に参加した経験がない）、③地域等で行われる体験活動の情報が届かない、④社会とつながりがない子どもへの体験イベントの情報提供方法が確立されていない、の4つが挙げられます。これらの問題について、地区単位でなく、周南市全体で解消を目指していくためには、市内の支援機

Q なぜこの取組を？
A 子ども・若者の体験格差は支援機関が連携してこそ解消へと前進できる

関が頻繁につながり、情報交換や協議等で子ども・若者の現状をできるだけ正確に把握することが最優先事項と考えました。こうした考えの下、支援機関をつなぐために支援の連携プラットフォーム構築に向けて取り組みました。

地区単位ではなく、
周南市全体で
体験格差の
解消を目指します



令和7年度
取組事例

Report no. 4

周南市

取組テーマ

周南こどもLAB（ラボ）

子ども・若者が多様な体験機会に参加しやすい環境づくりに向けた支援機関の連携体制の構築



【対象者】

不登校やひとり親家庭、貧困、障害などの困難に直面する子ども・若者

【取組団体】

周南市青少年育成市民会議、こども食堂（周南ちるちあネット）、青少年教育施設（大田原自然の家、中須自然の家）、学校（周南市小・中学校）

Q どのように進めたの？

A 子育て支援民間団体主催の
情報交換会で協力を依頼。
協議を重ねて体験活動を実施

周南圏域のこども食堂・地域食堂、子育て支援団体、福祉団体、民間企業、学校、周南市、社協などが集い、子育て支援に関する情報交換や研修を実施している「**周南ちるちあネット**」主催の情報交換会に参加し、支援の連携プラットフォーム

フォーラムの構築に向けて協力を依頼した上で、共に取組を進めることを確認し、新たな協議の場として、「周南こどもLAB(ラボ)」を設立しました。その後、計7回の情報交換や協議の中で、子どもの声を聴くアンケートの内容や実施方法、体験活動の実施時期や会場、対象などの詳細を話し合い、決めていきました。令和8年1月には、子ども・若者の声を反映するため、体験活動を通じて信頼できる大人を介し、子どもたちから意見を集める「**周南こどもLAB in 富田中学校**」を開催するとともに、参加した子ども・若者を対象にアンケート調査を実施しました。

Q 取組全体の感想は？

A 支援機関同士のつながりの
創出、子どもへのアンケートに
よる現状把握が大きな収穫

周南市内の支援機関にこれまでなかったつながりができ、それぞれの支援機関の取組内容や対象とする子ども・若者などについて理解が深まりました。また、体験活動後に実施した子どもへのアンケートにより、まず、半数以上の子ども・若者が体験活動への参加を希望していることを確認しました。また、体験活動の内容については、バーベキューやそうめん流し、他の学校の生徒・児童と話したり、遊んだりする機会、居住地区での祭り・行事の手伝いなどに興味があることを確認しました。取組を通じて、子ども・若者の現状や思考が一部把握できたこと、目指すべき支援の連携プラットフォームの形が明確になったことが、令和7年度の取組による大きな収穫と考えます。

それぞれの支援機関の
取組・対象とする子ども・
若者などについて
理解が深まりました

青少年育成市民会議で
本取組を決定

周南市の子ども・若者に関する課題解消を目標に、支援の連携プラットフォームの構築および多彩な体験機会の創出の取組を決定。

子育て支援民間団体「周南ちるちあネット」
主催の情報交換会に参加し協力を依頼

取組の趣旨を説明し、支援の連携プラットフォームへの参加や、子どもの声を聴くためのアンケートに関する協力を依頼。

【交流会参加団体】

周南圏域のこども食堂・地域食堂、子育て支援団体、福祉団体、民間企業、学校、周南市、市社会福祉協議会など

新たな情報交換の場「周南こどもLAB(ラボ)」
を設立し協議を実施

令和7年8月から7回にわたり協議を実施。

【協議内容】

- ・子ども・若者の声を聴くためのアンケートの内容と実施方法について(令和7年度に体験イベントを通じて集める)
- ・子どもの声を踏まえた体験機会の提供(実施時期、会場、対象、内容など)について(令和8年度以降実施予定)

体験イベントを通じた子どもの声の聴き取り
(主催:周南市青少年育成市民会議
共催:周南ちるちあネット)

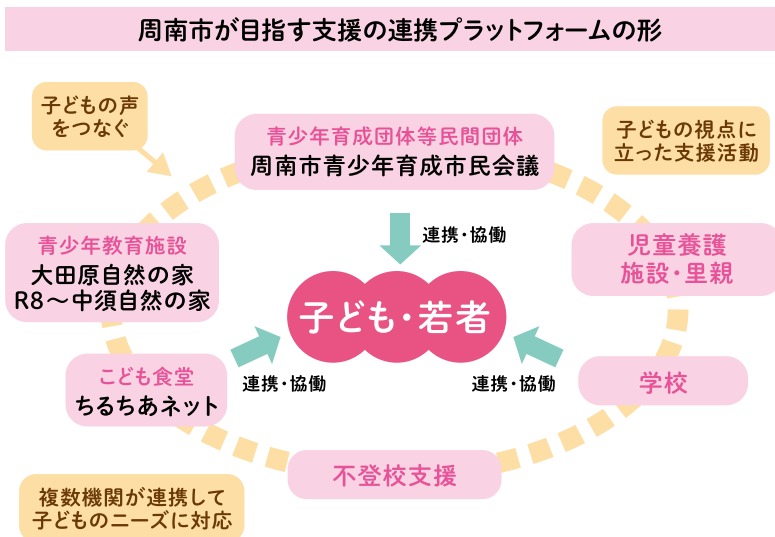
- 体験コーナーやこども食堂、クラフトコーナーなど
- 次年度の体験イベント等に活かすため、参加した子ども・若者にアンケート調査を実施



Q 今後の課題は？

A 支援機関がより密に連携し、
子どもの声を適切につなぐ。
声を直接聴く仕組みづくりも

令和7年度は、支援の連携プラットフォーム
づくり注力しました。次年度以降は、この基礎
となる支援の連携プラットフォームを活かし、



代表者の声



周南市青少年育成市民会議
会長 平岡 正夫 さん

支援の連携プラットフォームの充実
で一人でも多くの困難に直面する
子ども・若者とつながりたい

令和7年度の取組はあくまで基本の「き」で
す。次年度は、より支援の連携プラットフォーム
を充実させ、困難に直面し、かつどの支援機
関ともつながっていない子ども・若者の声も把
握できるような体制づくりに注力します。

体験活動に参加したくても参加できない子ども・
若者とつながっている支援機関と密に情報交換
ができ、より深く協議できる関係性を構築して
いくことが課題です。並行して、今年度に関し
ては子ども・若者の声は、関係する支援機関に
属する大人を介しての収集となったため、子ど
もの声を直接聴けるような仕組みづくりにも取
り組んでいきます。また、どの支援機関ともつな
がっていない子ども・若者をどのような方法で
把握し、アプローチしていくかも大きな課題で
す。アンケートに答えやすいような仕組みづく
り、支援の連携プラットフォーム「周南こども
LAB(ラボ)」への参加団体の拡大も図ります。

●実施した体験活動

子ども・若者の現状や思考を
知るための体験活動を実施

求められている体験活動がどういったものか
を把握するため、食育やものづくりなど多彩な
ジャンルを盛り込んだ体験活動を実施。

■対象となる子ども・若者への声かけ・つながり

- 対象者へのチラシ配布
- 学校から保護者へメール配信
- 市民会議の構成団体や学校から部活動の生徒へ声かけ



周南こどもLAB in 富田中学校

【日時】令和8年1月31日(土)10時00分～14時00分

【内容】三作神楽体験コーナー、こども食堂、クラフトコーナー（竹の食器作り、木のたまご磨き）を実施。「朝ごはんを食べよう」啓発チラシ配布

【参加人数】小中学生と保護者67名、スタッフ47名(小中高大生10名、大人37名)





東和小学校講師による起業体験の様子

本町の喫緊の課題として、経済的困難に直面する家庭の増加や両親の共働き等による子どもの孤立化が挙げられます。そして、学校教育活動以外に、個々の家庭によって本町の豊かな自然と触れ合う機会に差があることや、子どもの居住地によっては、車・船での移動に1時間近くを要する等、移動の困難さに起因する体験格差が生じることも課題です。

また、令和7年度は、福祉課内に「**こども家庭**

Q なぜこの取組を？
A 本町すべての子どもや若者に支援を行き届かせるために各支援機関をつなげたい

班」が新設されましたが、青少年育成町民会議との連携が充分には図られていませんでした。さらに、支援機関が各々で行っている子ども支援活動について、情報交換を行う仕組みを構築するところが課題となっていました。そこで、支援機関をつなぐプラットフォームを形成することで、本町すべての子ども・若者のニーズに合わせた支援をより効果的に行うことができるよう、本事業に取り組みむこととしました。



令和7年度
取組事例

Report no. 5

周防大島町

取組テーマ

ふるさとの海や山など
地域の資源を活かした
体験型居場所づくり
地域創生と成果創出を目指す取組を通して



【対象者】

学校や地域とのつながりが希薄なさまざまな困難に直面する子ども・若者

【取組団体】

周防大島町青少年育成町民会議、町内小・中学校、学校運営協議会、PTA、おやじの会、商工会、町教委(社会教育課)、町福祉局部、地域協育ネット、B&G海洋センター など

Q どのように進めたの？

A 各支援機関とつながり、子ども・若者の情報を共有。体験活動の企画に活かす

まず、周防大島町青少年育成町民会議運営委員会をプラットフォームの中心に位置づけ、委員が所属している支援機関との連携を進めました。同時に、子ども・若者をターゲットとした体験活動を実施している団体等を個別に訪問し、

本事業の内容説明を行い、協力をお願いしました。その後、支援機関の活動内容や対象となる子ども・若者に関する情報を共有し、支援機関が主催する体験活動やイベントに参加している子ども・若者の現状や様子についても共有を図りました。その上で、第一段階として、「支援機関が主催する体験活動やイベントに参加しない子ども・若者の様子を知ってもらうこと」を目的とし、町内小・中学校の教育活動と連携し、本町の自然を活かした体験活動や町づくり体験活動を企画・運営しました。

Q 取組全体の感想は？

A 大きな一歩が踏み出せ来年度以降に活かそう

支援機関で情報交換が行えるようになり、それぞれの組織のもつ強みや各支援機関が関わっている子ども・若者についての情報が共有できたのは大きな一歩だと感じています。こうしてつながりが生まれた結果、イベント等に参加している子ども・若者に、幅広く支援機関が主催するイベント等の情報を提供できる基盤ができました。また、学校での体験活動やイベントを参観したことで、子ども・若者の普段の様子も知ることができました。今後の活動に活かす手応えを感じています。

町内の支援機関の つながりづくり

町内の子育て機関・家庭教育支援機関・団体に参加を呼びかけ、青少年育成町民会議の運営委員会で連携基盤の形成に向けた情報交換・協議を実施

子ども・若者の 多様なニーズの把握

- ・青少年育成町民会議委員や関係団体から意見聴取
- ・関係団体主催の体験活動やイベント等のアンケート調査を参考に子ども・若者の声を収集
- ・周防大島町適応指導教室「あろは教室」に通う不登校の児童・生徒に体験活動に関するニーズ調査を実施

体験活動の実施と 子どもと町内の子育て・ 支援機関のつながりづくり

学校での体験機会提供の際、町内の支援機関にも参観を呼びかける

- ・豊かな海や山を知る調査・体験活動
- ・豊かな海や山を守るボランティア活動
- ・豊かな自然や歴史・文化を活かした起業体験
- ・町づくり提案
- ・地域イベントに参加

今回の取組で各関係機関のつながりが生まれた結果、体験活動やイベントなどの情報を幅広く提供できる基盤ができました



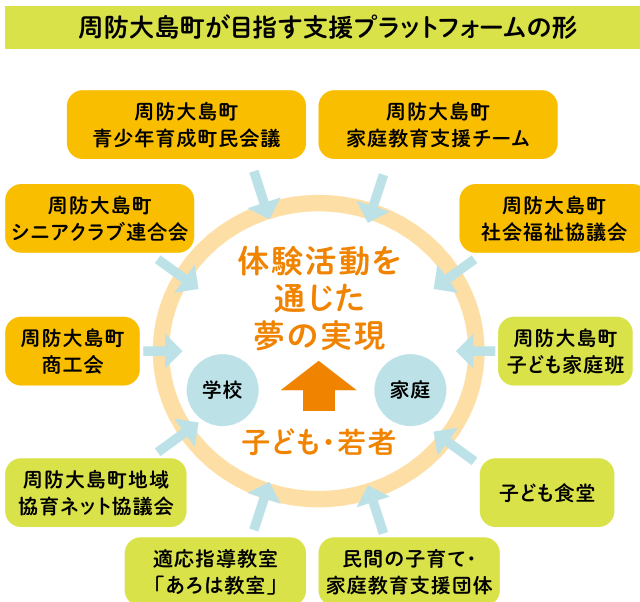
Q 今後の課題は？

A 支援機関のつながりの強化、子ども・若者のニーズ調査のより良い方法の模索が課題

学校や地域とのつながりが希薄なさまざまな困難に直面する子ども・若者のニーズ調査はハードルが高く、体験活動やイベントへの参加を十分に促せませんでした。また、本事業へ参加していただける子育て・家庭教育支援機関をさらに増やしていくことも求められます。現状を踏

まえ、さまざまな困難に直面する子ども・若者と、どのようにつながりを築いていくかが今後の課題です。支援者については、連携活動を含めた横のつながりをどのように深めていくかが課題です。来年度は課題解決の一步として、プラットフォーム形成事業関係者等が、本町の子育て・家庭教育支援機関とのつながりを密にできるよ

う、それぞれの主催イベント・体験活動への運営の協力・参加を実現したいと考えています。このことと並行して、困難に直面する子ども・若者へのニーズ調査も支援機関と連携し、より良い方法を模索しながら実施していきたいです。



事務局担当者の声



周防大島町青少年育成町民会議
事務局担当
亀井 崇史さん
(周防大島町教育委員会社会教育課社会教育主事)

子ども・若者の思いや願いを活かせる場所を創りたい

子ども・若者の思いや願いを活かせる体験活動を、学校・家庭以外でどのように地域に創っていくか、それに関わる人材育成を考える必要があります。また、子ども・若者が参加しやすい環境の整備や、保護者の理解という課題にも来年度は取り組んでいきます。

●実施した体験活動

学校の教育活動と連携し、子ども・若者が能動的に関わる体験活動を実施

学校と連携して本町の自然や歴史・文化を活かした体験活動を実施しました。

■対象となる子ども・若者への声かけ

●案内チラシの作成・配布(観覧板等)、各種公
共施設への掲示

●小中学校のホームページや学校だより



和太鼓ワークショップ

【日時】令和7年11月15日(土)
【内容】本町で活動する和太鼓集
団の団員を外部講師として招き、
実施。団員の動きや叩き方を真似
しながら演奏を楽しんだ
【参加人数】
久賀小3・4年児童31名



東和フェスティバル

【日時】令和7年11月8日(土)
【内容】児童のチャレンジショップを
バザーで設営し、6年児童が起業
体験で講師と考案・作成したオリ
ジナル商品を販売
【参加人数】
東和小全校児童62名

宇部市

取組
テーマ

みんなで育ちあう体験会

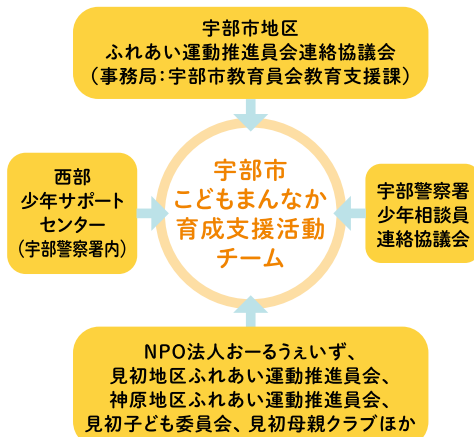
行政機関や民間団体、地域の関係団体等支援機関との
ネットワークによる継続した支援体制の構築



【対象者】 不登校や非行問題等を抱えるなど、家庭養育に支援が必要な子どもや若者

【取組団体】 宇部市地区ふれあい運動推進委員会連絡協議会、宇部警察署少年相談員連絡協議会、西部少年サポートセンター（宇部警察署内）、NPO法人おーるうえいず他

プラットフォームのイメージ



Q なぜこの取組を？

A 継続的な支援のために支援の連携プラットフォームが必要

不登校や非行など、宇部市においても家庭養育に支援が必要な子ども・若者が見受けられます。状況を改善するには、困難に直面する子ども・若者が私たち大人に対する信頼感を構築し、自己肯定感や自己有用感を高める取組を着実に進めていく必要があります。そこで、多様な体験活動を通じて、大人と子どもたちが一緒に悩み、楽しみ、笑い合える関係を築きたいと考えました。支援を必要とする子ども・若者が求める体験機会を創出し、継続して提供するためには、支援機関が揃って情報共有を含め協働していくことが必要と考え、本事業に取り組みました。

Q どのように進めたの？

A 複数の支援機関でチームを設立し、定期的な情報・意見の交換を

市内の支援機関に声をかけ行って「宇部市子どもまんなか育成支援活動チーム」を立ち上げ、全4回にわたるチーム会議を



e スポーツ大会

開催し、意見交換しながら、横のつながりを深めました。困難に直面する子どもへの体験活動についても、対象者のピックアップを含め、内容の協議・検討を重ね、参加型の演劇体験を盛り込んだeスポーツ大会の開催を決定しました。会議の中で「子ども・若者のゲーム依存が懸念」との意見もありましたが、他者との信頼関係構築による自己肯定感の向上を目指すことを主軸に置き開催に至りました。

Q 感想と今後の課題は？

A 成果は支援機関の横のつながり。課題はニーズの掘り起こし

子ども・若者の健全育成に関わる団体の横のつながりができました。また、共に



ふれあいクッキング

【日時】 令和7年9月6日(土) 10時00分～13時00分

【内容】 子どもが自分たちで協力しながら給水車の水を利用して災害時にも役立てるポリ袋を使ってご飯を炊き、自助・共助を体験

【参加人数】 16名

●実施した体験活動(一部)

「仲間とつながること」を意識した体験活動を実施

■対象となる子ども・若者への声かけ
●ホームページやSNS、紙媒体によるネットワークからの情報発信

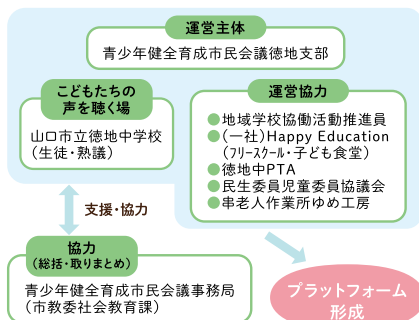
大きな事業に取り組んだことで、各支援機関の思いが共有でき、モチベーションアップにもつながりました。体験活動の企画に必須の「子ども・若者が何をやってみたいのか・何をやりたいのか」というニーズの掘り起こしについては、より良い方法を模索していく必要があります。次年度も、チームの連携をさらに深め、さまざまな体験活動に取り組みしていきたいです。

やまぐちこどもまんなかで
WiFiプロジェクト

子どもも大人も誰もがつながる地域のプラットフォーム創り

【対象者】 徳地地域の
子ども・若者【取組
団体】 山口市青少年健全育成市民会議(市教委社会教育課)、青少年健全育成市民
会議徳地支部、地域学校協働活動推進員、(一社) Happy Education、PTA、
民生委員児童委員協議会、串老人作業所ゆめ工房他

「子どもも大人もつながる地域」を目指す、まずは支援の連携プラットフォームの形成が必要と考え、本事業に取り組みました。



Q なぜこの取組を？

A 持続可能な地域づくりのために
支援機関がつながれる
土台がほしい

少子化や家庭形態の変化、学校の統廃合等により、子ども・若者を取り巻く環境が年々変化し続けている近年、地域の中で子ども・若者が安心して楽しく過ごせる居場所づくりは大きな課題の一つとなっています。子ども・若者の居場所を守るとともに、子どもを支える支援者の確保に向けた持続可能な地域づくりには、子ども・若者や大人の声を聴き、地域における課題を把握し、解決に取り組むことが必要です。その実施にあたり、地域で活動する個人・支援機関等がつながり、力を合わせていきたいと考えました。将来的には、「子どもも大人もつながる地域」を目指す、まずは支援の連携プラットフォームの形成が必要と考え、本事業に取り組みました。

Q どのように進めたの？

A 学校の熟議の時間を活用し、
子どもの声の収集からスタート

まず、「子ども・若者のやってみたいを実現」に向けて、徳地地域内で中核組織となる青少年健全育成市民会議徳地支部(運営主体)と運営協力の支援機関が協議の上、子どもの意見を聴くことにしました。その場として徳地中学校と連携し、同中学校の「熟議の時間」の中で、中学生が今やりたいことについて自由に発言してもらい、子どもの声を集めました。その後、支援機関に参加を呼びかけ、支援の連携プラットフォームの輪を広げるとともに、子どもの声を反映させた体験活動を企画し、実施しました。

Q 感想と今後の課題は？

A 子どもと大人の接点が生まれた。
いかに地域を巻き込むかが課題

子ども・若者のやりたいことと、地域が抱える課題をリンクさせることで、地元の子育て支援に主体性をもたらせるよう工夫しました。こうした取組を通じて

とくちこどもまんなかキャンプ
～年越しそば流し&星空観測～

【日時】令和7年11月29日(土)・30日(日)

【内容】年越しそば流し、カレーづくり、キャンプファイヤー、星空観測、竹釣り竿づくり、BBQ

【参加人数】16名(中学生5名、小学生11名)

子どもの「やってみたい」と
地域課題をリンクさせた体験

●実施した体験活動(一部)

- 対象となる子ども・若者への声かけ
- チラシの作成・配布
- 地域広報紙にて記事掲載
- 市ウェブサイトでの情報発信

子ども・若者と大人のコミュニケーションの機会(接点)が増やせたことや、子どもが地域に興味を持ってもらえるようになりました。支援の連携プラットフォームを拡充させ、どのようにして地域全体に波及させるかが次年度以降の課題です。



缶バッジづくり

防府市 (佐波地域)

取組
テーマ

わくわくサークル佐波

学校や自治会などの支援機関の連携を図り、
子どものニーズに対応した体験機会を創出



【対象者】 佐波地域の子ども・若者

【取組
団体】

佐波地域青少年育成連絡協議会、佐波小中学校、佐波小中学校
PTA、佐波地域自治会連合会他



防災SABA (地域の危険箇所マップ作り)

【日時】令和7年11月30日(日)

【内容】三方向に分かれてまち歩き、危険箇所等のマーキングや撮影した写真をもとにした危険マップを作成

【参加人数】35名

● 対象となる子ども・若者への声かけ
● 広報紙を作成し、自治会員を通じて全戸へ配布

● 実施した体験活動(一部)

子ども・若者を取り巻く環境が変化する中においても、体験活動がその後の人生を豊かにする傾向は変わりません。そこで、子ども・若者のニーズに対応した体験機会を創出するため、佐波地域の支援機関による支援の連携プラットフォームの形成に取り組みました。また、子どもたちのニーズに応える体験活動だけでなく、**子ども・若者と地域が一緒になって地域課題の解決に取り組む体験活動を企画・実施**することで、子ども・若者と地域のつながりの構築や、子ども・若者を守り育てる地域の基盤づくりができました。次年度以降も、より良い体験活動を子ども・若者に届けられるよう、支援の連携プラットフォームの拡大・充実を図っていきます。

学校や支援機関の連携により
人生を豊かにする体験機会を創出

防府市 (華浦地区)

取組
テーマ

盲目のバイオリニスト 白井崇陽ふれあいコンサート

華浦地区の子ども・若者を支援するための
充実した支援の連携プラットフォームの形成を目指す



【対象者】 華浦地区の子ども・若者

【取組
団体】

華浦地区青少年育成連絡協議会、華浦小学校、鞠生幼稚園、華浦公民館、華浦地域自治会連合会、華浦地区社会福祉協議会



盲目のバイオリニスト 白井崇陽ふれあいコンサート

【日時】令和7年11月11日(火)

【内容】全盲でありながらプロのバイオリニストとして活躍される白井崇陽氏を招いてのふれあいコンサート

【参加人数】

[午前の部]560名(児童450名、園児60名、教職員50名)

[午後の部]100名(地域の方、児童・園児の保護者)

● 対象となる子ども・若者への声かけ
● 華浦公民館ホームページによる情報発信ほか

● 実施した体験活動(一部)

子ども・若者一人ひとりの自己肯定感や社会的自立に必要な意欲・態度などの育成には、支援機関が連携してサポートすることが必要と考え、連携プラットフォームの形成に取り組みました。華浦地区では、これまでも連携して各種事業に取り組みましたが、新たに**小学校や幼稚園とも連携**したことで、より多くの子ども・若者に体験機会が提供できました。また、小学校・幼稚園では、事前・事後に指導の時間を設け、人権感覚の醸成や人間力の向上につながったと考えられます。次年度以降もより良い体験機会となるよう、継続した座学や体験活動等を行なっていきけるよう、支援の連携プラットフォームの充実を図ってまいります。

小学校や幼稚園ともつながり
より良い体験活動が届けられた

今井 悠介氏

Special Interview

子どもたちへの体験機会について理解を深め、課題解決に向けて社会全体で共に考えていくため、令和7年8月23日(土)、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンの代表理事・今井悠介さんを講師にお招きし、理解促進講演会を開催しました。講演会終了後には、今井さんに活動の原点とこれまでの歩み、体験格差とその影響など、さまざまなお話をお聞きました。

Q 「体験格差」というテーマで一番伝えたいメッセージは？

「子どもがやってみたいと思う体験を、実際に体験できる社会を作っていこう」です。決して間違えてはならないのは、大人目線からの「子どもにとって良い体験」ではなく、「子ども自らが望む体験」の提供です。実現するには、まずは大人たちが手を取り合い、みんなと一緒に考えていける社会にする必要があると思っています。

Q 10年以上の取組の中で

変わってきたこと、あるいは変わらず残っている課題は？



私が東日本大震災を契機に法人を設立した当初は、子どもの貧困問題は一部で認識されるようになったばかりの頃で、社会的に十分な認識はありませんでした。ただ活動を始めて十数年の間に子どもの貧困問題に対する認識はずいぶん変わった印象があります。私たちはNPOとして経済的な困難に直面している家庭の子どもたちの放課後の学びや体験の機会を支えていこうという活動をしてきましたが、こういう取組を徐々に自治体が政策として取り入れるような事例が増えてきて、子どもたちへの支援がだんだん広まっているのを実感しています。一方で、自治体が主導で事業を実施

する際、財源や制度上の制約などの事情もあり、支援対象となる学びに「体験」が含まれないといったケースがあります。なぜ体験への支援が進まないのか。それは社会全体としての合意が得られないからです。要は**社会全体で取り組まない**と、**支援は広がっていない**んです。ただ、私たちが体験機会の創出に取り組んでいる中で共感する人たちが現れており、機運はあると思っています。

Q 体験活動が子どもたちに与えるものとは？



体験活動は子どもたちに**3つの機会**を与えると私は考えています。1つ目は子どもたちの**成長の機会**です。現代の暮らしは、大人も含めて、五感の中でも視覚と聴覚に偏ってしまいがちです。ですから、実物、本物に出会うとか、視覚・聴覚以外の感覚を使う、体験するっていうのはものすごく大切で、その中で子どもたちにはいろんな感情が芽生えるんです。それが学びになり、経験になり、成長につながっていくと思っています。2つ目は**選択肢の幅を広げる機会**です。子どもたちの貧困問題を考えたとき、やはり一番の問題点は選択肢が制限されていることです。ですから、実際に体験していくことで、自分はこれが好き、こんなことをやってみたい…と選択肢を広げることが重要だと思います。3つ目は、**人や社会とつながる機会**で

こどもまんなか育成支援活動講演会
「すべての子ども・若者に
体験機会の提供を」

講師 今井悠介氏

(公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン代表理事)



【子どもの体験格差の現状】

◎低所得世帯の約3人に1人が、直近1年間、学校外の体験が「何もない」

◎親自身が子ども時代に「体験ゼロ」の場合、その子どもの約2人に1人が「体験ゼロ」※

【体験機会の剥奪は子どもから何を奪うのか？】

◎子どもの成長の機会

★五感↓感情↓思考⇨経験・学び ★色んな「自分」と出会う
★余白、遊び↓自分で考える、決める ★多様な知性、感性を伸ばす

◎想像力の幅・選択肢を広げる機会(支援者の言葉)

子どもたちにとって初めての旅行だが、北海道の現地に着いても、沖縄の地元にあるようなアニメショップ等、普段の生活と全く同じことをやりたがる。さまざまな体験をしたことがなく、北海道に来たらやってみたいことが思い浮かばない。

◎人や地域とつながる機会

虐待やネグレクトなど、子ども時代の逆境的体験が将来の健康や社会的経済的機会に負の影響を与える。18歳までのポジティブな体験、保護的体験が、逆境体験の負の影響を緩衝し、ウェルビーイングにつながる。

【大切にしたいこと】

①子どもの意思、「やってみたい」という気持ちを中心に考える

↓体験保障を「子どもの権利」として捉える

↓親の「消費活動」にしない、過度な競争にさらさない

②体験を通じて、子どもを見守る大人の存在

↓体験を通じて湧き起こる感情を大切に

↓気づき、学び、感情の共有をする

【体験格差をなくすために必要なこと】

①体験格差の実態調査を継続的に実施する

②体験の費用を子どもに補助する

③体験と子どもをつなぐ支援を広げる

④体験で守るべき共通の指針を示す

⑤体験の場となる公共施設を維持し活用する

※【出典】チャンス・フォー・チルドレン
「子どもの『体験格差』実態調査」(2022年)

す。体験そのものも大切ですが、体験を通じて、どんな人と出会えるかも大切です。もちろん、今挙げた以外にも体験活動が子どもたちに与える影響はたくさんあると思います。だからこそ、体験活動とは本当に多様で、いろんな価値があり、いろんな意味があるということを社会に知っていただきたいです。

Q 体験格差の解決に向けて
実際に取り組まれている
ことを教えてください。



チャンス・フォー・チルドレンでは、経済的

困難に直面する家庭の子どもが学習塾や習い事、体験活動等に利用できる支援制度や、子どもの体験奨学金事業に取り組んでいます。後者の体験奨学金事業には、「ハロー・カルチャー（文化・体験との出会い）」と「ハロー・ローカル（地域との出会い）」という2つのメッセージを込めており、2022年に立ち上げたばかりの取組ですが、活動を行う中で、国や自治体も巻き込んだ財源の確保、老朽化や少子化などにより維持管理が難しい公共施設に対してのアプローチ、また、そういった場所や体験活動や地域と子どもたちをつなぐ存在「コーディネーター」の発掘が重要だと考えています。特にコーディネーターは、体験格差の解消に地域全体で取り組むためには、どの地域にも必要な存在だと思います。私たちも地域の中であらう

な方に話を聴いて、紹介してもらったり、ディスカッションを重ねたりしながら、コーディネーターを担ってくださる方を丁寧に見つけています。はじめのうちはコーディネーターを探すのに苦戦されると思いますが、まずは地域を知り、地域のキーマンとつながるところから始めるのをおすすめします。

Q 山口県への示唆、そして、
未来へのビジョンを教えてください。



体験活動の機会をすべての子どもに、日本社会全体で届けていくという今の取組を、ぜひ力を合わせて進めていただきたいです。山口県はとても広いので、地域それぞれに異なる特徴があるかもしれませんが、ぜひ地域の方たちの声に耳を傾けながら進めていってほしいです。それと、やはり行政と地域とが「一緒に」やっていくことが大事です。つまり、地域に対して「決めた枠組みをやってください」という姿勢ではなく、地域の方が主体になってできるような枠組みをどうやって作っていくかが行政に求められていると私は思います。ぜひ現場の声を聴きながら取り組んでいってもらいたいです。

チャンス・フォー・チルドレンのミッション
多様な学びをすべての子どもに
「経済状況や一人ひとりの特性に関わらず子どもたちを多様な学びの機会によって包摂できる社会」

子どもたちの
声に耳を傾け
社会全体で
子ども・若者を
温かく支える
環境を目指します



このサポートブックは、萩千手様、株式会社オータニホールディングス様、株式会社オータニ様、株式会社はんど様、株式会社美祢工務店様、青森市 和田洋子様のご寄附により作成しています。



山口県青少年育成会議は、
子どもたちの体験活動を
サポートしています

やまぐち けん せい しょう ねん いく せい けん みる かい ぎ
山口県青少年育成県民会議

〒753-8501 山口市滝町1-1

山口県子ども家庭課 青少年・家庭福祉班内

TEL.083-933-2634

